

県立高校「未来の学校」構築事業

研究開発最終報告書

実践校種別	学校名
「国際的な教育プログラムを研究する高校」	飯田風越 高等学校

1 実施期間

令和2年4月1日～令和7年3月31日

2 研究開発計画（令和元年度策定）の概要

(1) 構想名
リニア新時代の「小さな世界都市・田園型国際学術都市」を目指す飯田市をはじめとする南信州において、国際的な教育プログラムを研究し、その長所を生かしたカリキュラムや指導法を開発するとともに、他校にも開かれた海外大学進学プログラムを構築する。
(2) 研究開発の実施対象
全日制普通科、全日制国際教養科
(3) 研究開発の目的と目標
【目的】 豊かな人間性と高い教養を持ち、他者と協働し、主体的に将来を切り拓く力と、地域・社会を牽引する資質を持った人物を育てるためのプログラム（F-スタイル）を開発する。F-スタイルとは、国際教育プログラム等の研究によりその長所を参考に開発する本校独自の学びの指導・評価方法、また、学びの成果を活かし海外進学も含む進路選択の幅をさらに広げ進路実現をはかるために編成する本校独自のカリキュラムや仕組みを目指す。 F-スタイルは授業や留学指導をはじめ本校に関わる全ての事象に共通するものであり、生徒・教員の日々の活動の土台となるものである。また、教職員が指導・研究を通して体験する研修の一環としても捉え、研修機会に限られる現職の教職員にとって教育手法や教育観をアップグレードする好機とする。 【目標】 地域に根ざしたアイデンティティとグローバルな視野をもって、地域や世界の未来を創造できる人を育成するために、国際的な教育プログラムの長所を生かした飯田風越独自のカリキュラムや学びの指導・評価方法を研究開発するとともに、学びの成果を活かしながら、海外大学進学を実現するためのプログラムと支援体制を構築する。
(4) 研究開発概要（目標を達成するための具体的取組や方策）
◇ F-スタイルの研究・開発 【F-スタイルの指導方法・評価方法の研究・開発】 本校における既存の指導・評価方法を見直し、国際教育プログラム等で用いられている諸科目の指導について研究し、F-スタイルの指導方法と評価方法を研究・開発する。 - 国際教育プログラムの Subject Guide(科目履修による到達目標等を明示したもの)、Unit（学習トピックの明示等）、評価情報(評価方法の具体についての説明等)の提示等を参考に、F-スタイルの指導・評価方法を研究・開発する。 - サブ・カリキュラムコーディネーターの教育課程委員長を中心に、すべての教科・科目について本校既存のシラバスの進化形を研究・開発する。 - 学習内容や進度計画に加え、国際教育プログラムの概念形成を意識した授業/評価研究をおこない、学びによって「獲得を期待する力」を言語化することで、到達目標の明確化を図り、指導単元の内容・到達目標の決定、学習プロセスの明確化、指導後の振り返りを「見える化」し、評価のためのF-スタイルのルーブリックシートを開発する。

【職員校内・校外研修の実施】

研究・開発のため、先進的な指導についての職員研修を計画・実施する。職員集団が教科を超えた指導の必要性に気付き、実際に行動するきっかけを与え、新たな時代の指導・評価方法を知る機会を持つことで、自身の指導方法や教育観のアップグレードをおこない、モチベーションを高める機会とする。

- ・ 県内外の現職教職員等を講師として招聘し、校内職員研修会を開催する。
- ・ 国際教育プログラムのワークショップに複数教科の職員が参加し、その指導・評価について本格的に学び、受講後は校内報告会を開催し、職員全体での研修内容の共有と新しい学びの指導のために必要なことを学ぶ機会とする。
- ・ 指導・評価方法研究を通じた職員研修

指導・評価方法の研究・開発過程そのものが、本校教職員にとって新しい学びの指導・評価方法を知る機会となる。開発した指導・評価方法の試行は、生徒のみならず、本校に勤務する教職員にとって、既存の指導手法や教育観のアップグレード機会となる。これによりすべての年代の教職員が次世代の新しい学びの指導者として育つことに期待する。

◇ F-スタイルの留学準備支援体制の整備

【新学校設定科目「アカデミックスキル」の検討・設置】

既存の科目選択の工夫も含め、留学希望者のための特別講座やインナーコース、留学準備に必要な内容を含む「学校設定科目」の研究・設置について研究を行う。研究開発にあたり、先進校の視察等を実施する。

- ・ 学校設定科目等の方法を用いて、アカデミックな場で必要とされる語学力育成の他、出願書類作成やエッセイライティング指導の機会を設定する。
- ・ 海外語学研修における留学準備カリキュラム検討・試行

本校では、国際教養科ならびに普通科の1年次3月に希望者対象の海外語学研修を取り入れている。研究校として、同研修内に留学希望者対象の海外大学留学準備の内容を含む新たなコースを設定することを研究・試行する。

3 最終年度の研究開発計画（令和元年度策定）における目標や目的の達成状況について

本校の研究は以下の5つのプロジェクトに分かれて研究を行った。今年までの5年間の取組の達成状況について順に記載する。

（1）各プロジェクトの達成状況

◇ F-教科指導・単元計画

5年前の本校の課題として、講義型の授業一辺倒であり、生徒からのフィードバックを経ることのないというものがあった。その部分の改善案として、単元の設定の際に授業の中でどのようなことを生徒に学ばせたいのかという、学習全体を俯瞰する単元計画書を作成した。5年間の中で、この計画書を加除修正して、本校が目的としていたIBのエッセンスを取り入れ、単元全体の「本質的な問い」（何を学び、どのような考えに発展させられるか）を考えられる学習の最終目的から逆算する計画書とすることができた。また、ルーブリックと一体化することによって、学習の設計から評価までをどの教員でも一律に行うことができ、別の教員がその授業エッセンスを引き継ぐことができる形とした。後の項目でも記載していることではあるが、単元計画書の実践数は5年目には25件となり、すべての教科で本単元計画書を用いた実践を行うことができた。また、生徒の学習とは、学校の授業のみならず、学校生活全般で見るといえる意見から、生徒会選挙や文化祭・クラスマッチなどの活動においても本計画書を活用した。その結果、ほぼすべての学習者像を生徒に意識させることができた。

F-単元計画実践結果

授業における実践20例																				行事における実践5例				
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	①	②	③	④	⑤
探究	○	○			○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○			○		
知識		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
思考	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
協働	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
信念	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
広い視野	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
思いやり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
挑戦	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
バランス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
振り返り	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

○：伸ばしたい部分（事前設定）
 青：50%以上 赤：10%以下
 （「意識できた」と回答した率）

12

◇ F-ループブリック・観点別評価

ループブリックの運用については、令和5年度から実践をした。実際に運用する中で、以下のような課題がみえてきた。

- ・シラバスに明示されるような抽象度の高い表現では、生徒にとってわかりにくい。
- ・教員によってループブリックの作り方に差があり、同一教科内での評価に差が生じてしまう可能性がある。
- ・教員が一方的に設定する評価項目だけでは、生徒にとって真に主体的な活動とならないのではないか。

これらの内容を受け、以下のような取組を行った。

1点目、2点目については、教員間によるループブリック作成の差を解消し、どの教員もが簡潔に評価できるよう、本校独自の「メタ・ループブリック」を作成し、活用を促した。教員にアンケートを実施したところ、「気にしなければならない点が簡潔に述べられており使いやすい。」など、肯定的な意見が多く、有効性を確認することができた。

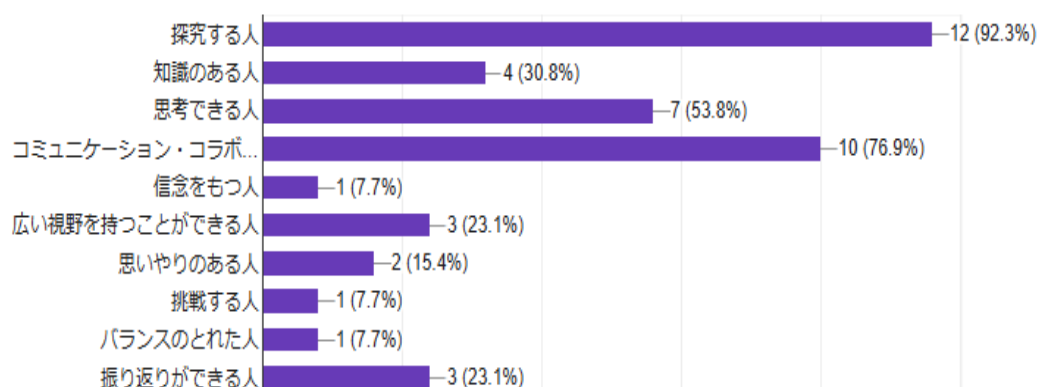
3点目については、教員が作成したループブリックを生徒にも提示し、生徒の意見も踏まえた上でループブリックを作成し、評価を行うようにした。生徒にアンケートを実施したところ、9割以上の生徒が、ループブリックに生徒の意見を反映させることに賛成であった。「発表の際に気をつけるところを知ることができる」「教師と生徒の両方で授業を作り上げている感じがする」などといった意見が寄せられ、生徒が主体的に学ぶことができるための効果的な取組になった。

◇ F-進路指導・留学指導

令和元年度より、留学フェロシップフェロキャラバン隊による海外留学説明会を不定期に実施。現芦屋市長の高島氏を中心に海外での留学体験を語ってもらい、本校生から質問を受けた。この取組が、FUETSU Global Campへとつながって行く。令和4年度からは、飯田市内の施設を借りて、国際教養科1年生全員が参加する行事として定着した。Global Campに出席した生徒は、留学をしてみたいという気持ちが高まった。また、昨今では急激な円高の影響で欧米への留学が費用的に難しくなっている。そこで、マレーシアなど東南アジア圏での留学に関しての取組を行った。その結果、欧米だけでなく東南アジア圏にも興味を示す生徒が増えた。

◇ 新学校設定科目「世界の中の日本」

「世界の中の日本」においては、上記の目標・目的がおおむね達成できたと考える。「世界の中の日本」の授業を受けた中で、飯田風越高校の10の学習者像のうち、どのような部分が伸びたか」という質問をしたところ、以下のような結果が出た。



上記の資料より、とりわけ「探究する人」「思考できる人」「コミュニケーション・コラボができる人」の部分の力が伸びたという結果が出た。「探究的な学び」「他者との協働的な学び」「身近な事から生徒の興味・関心に応じて広げ、深めていく」という授業スタイルで生徒の授業への意識を高め、地域に根ざしたアイデンティティとグローバルな視野を育成することにつながると考えられる。また、本校が同時に進めてきた「逆向き設計」の学習計画を基盤としたルーブリック評価をこの授業の中でも取り入れることで、計画的に単元計画を構成し、現在の生徒の到達状況に応じてアドバイスできた点が、探究的な学びを支える一助になったとも考えられる。

◇ 新学校設定科目「アカデミックスキル」

【アカデミックスキル①（2年2単位）】

この授業では海外大学を進路選択の1つとして検討してもらえることを目標に新学校設定科目の準備を行ってきた。その目標を達成するために準備期間の3年間で具体的にどのような目標を持って、どのような授業を2単位の授業で実施するのかを検討してきた。その結果、次の2つの目標のもと授業のシラバスを作成することにした。①自身の内面を深め、自分が学びたいことや自分の将来の夢と海外進学がどのようにつながっているのかを理解する、②海外大学進学後に必要となる英語力や論文作成スキル等を身につける。この2つを達成するために以下のシラバスを作成し、授業計画を立案し、実践した。

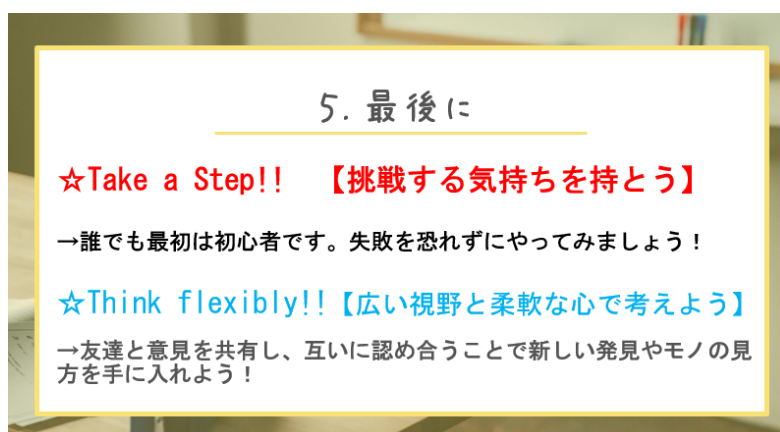
R6年度のアカデミックスキル（2年2単位）のシラバス（実施した内容に一部訂正）

月	内容
4月～6月	○英語のスキル学習 ノートテイキング アウトラインスキル（テキストや英語講義をまとめる） オンラインレクチャー（TED など） プレゼンテーションスキル ○自己理解と進路学習 自分とはどういう人間か？（自己紹介・他者紹介プレゼン） 日本の大学で学べることはなにか？①（風越高校特別講義）

7月～9月	○英語のスキル学習 ストーリーテリング パーソナルステイトメントプレゼンテーションの準備と発表 ○自己理解と進路学習 日本の大学で学べることはなにか？②（風越高校特別講義） 課題論文とパワポ作成 パーソナルステイトメントプレゼンテーションの準備と発表
10月～11月	○英語のスキル学習 スキミング・スキヤニング University Research Project ディスカッションスキル クリティカルシンキング ○自己理解と進路学習 University Research Project
12月～2月	○英語のスキル学習 サイテーション（引用方法） スピーキング・ディスカッションスキル ファイナルプレゼンテーション ○自己理解と進路学習 英語の資格試験学習 ファイナルプレゼンテーション

年度初めの授業では次の2点のことを生徒に伝えるようにしている。1つ目は英語のスキル学習は普段の英語の授業よりも高度な内容を伴うことがあるがそれに挑戦してみる姿勢を持つこと。2つ目は広い視野と柔軟な思考で進路について考えること。これは困難だと思えるようなことにも果敢に挑戦し、広い視野を持って進路について考えていくことがこの授業の根幹である「海外大学を進路選択の1つとして考える」というマインドの育成において大事だと思ったからである。

アカデミックスキル（2年2単位）の初回授業のパワーポイント一部抜粋



令和5年度は8名の国際教養科の2年生がこの授業を選択した。令和6年度は約2倍の14名の生徒が受講した。今年度は、アカデミックスキルで学んだことと進路とのつながりを意識する

ことや、学んだことを活かして何か行動を起こすように声掛けを行ってきた。なぜならこの授業は、学びや発見を通じて海外大学進学という選択肢もあることに気づき、留学準備などの行動を起こすきっかけとするためのものだからである。2月に行ったアンケートでは生徒は以下の様に回答している。

アカデミックスキルで学んだことと将来の夢や進路とのつながりを意識していますか？ あるいは何か心境に変化はありましたか？ 自由記述

- ・この授業で学ぶことで今まで考えてこなかった海外に繋がれる職業が視野に入ってきた
- ・アカデミックスキルの学習で英語により興味を持つようになった。今は英語の授業などは文章の読み取りや、文法などを身につけるために勉強している。
- ・この授業を通じて自分の興味のあることを発見したりするに心がけた
- ・みんなの前で自分の意見などを発表する力がついた。
- ・Fの時間で情報収集をするが、情報源の確認をするようにした。これは大学生活においても活用出来るのではないと思う。
- ・マレーシアの大学に進学したいので、IELTSの受験勉強や、英語能力の向上、実際にマレーシアを見るために県主催の留学プロジェクトに行こうと思う。
- ・将来はコミュニケーション力を必要とする職業に就きたいと考えている。この授業のグループワークなどでそれが身についてきたと感じている。
- ・国際的な分野で働きたいと考えていてこの授業を選択した。文系の分野には力を入れて勉強してきた。最近は社会情勢や歴史も理解しようと頑張っている。

【アンケート結果を一部抜粋】

生徒たちはこの1年間で職業に関する視野の変化や、興味関心があることに一歩踏み出してみたり、行動や意識に変化があったと回答している。この授業の目標は、この授業を通じて視野や意識を変化させ、進路実現に向けて一歩を踏み出すように必要な支援をしていくことである。そして、その延長線上に海外大学進学があるということを生徒に伝えていくことである。その点においてアカデミックスキル(2年2単位)の授業では3年間の準備期間と2年間の実践を経て、生徒に視野や意識の変化をもたらし、当初の目標を達成できたと言える。また、今年のアカデミックスキル(2年2単位)の受講生のうち3名は来年、アカデミックスキル(3年2単位)を受講予定である。生徒の視野と意識の変化の延長線長上に海外大学進学があることを願っている。

【アカデミックスキル②(3年2単位)】

今年度初めて3年次のアカデミックスキルを開講した。海外進学準備科目として科目目標は2年次と同様であるが、より現実的・具体的に海外大学への進学を検討している生徒が受講することを想定して、個別面談での進学カウンセリングや、実際の出願に必要なエッセイ作成や英語外部検定の対策も授業内容に加えて計画した。

2年次にアカデミックスキルを受講した生徒と今年度から受講する生徒が混在し、自己理解の度合いにおいても英語スキルの力においても差が見られたが、少人数(3名)の利点を活かし

て個に応じた指導・支援をすることができた。一例として、漠然と海外進学を希望している生徒に面談を複数回行ったり、IELTSを受検する生徒の要望に応じてスピーキングテストやライティングテストを個別に練習したりすることができた。

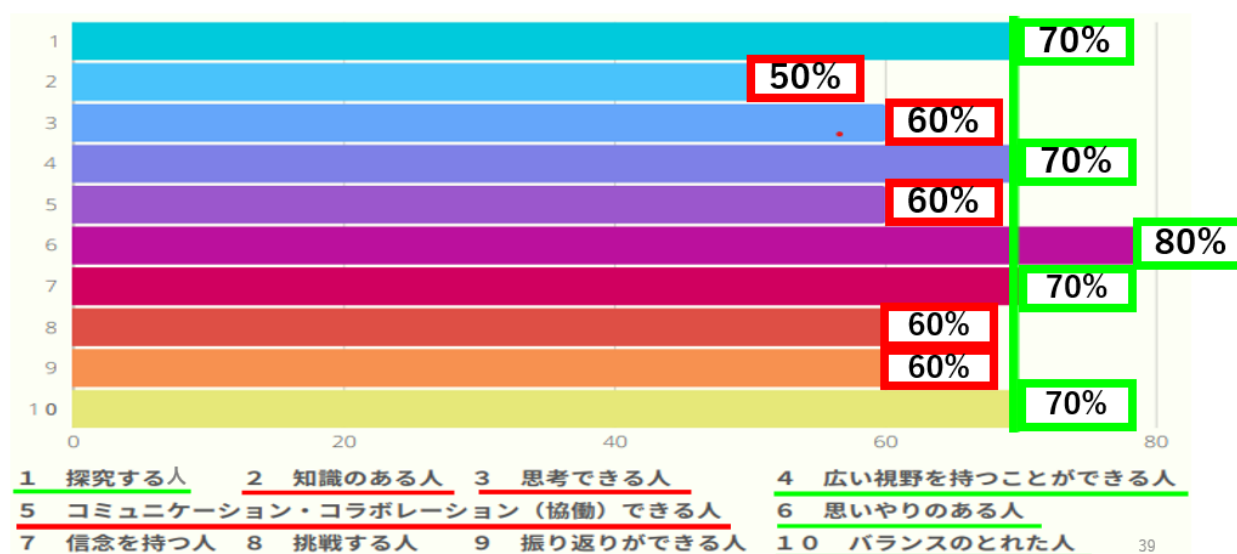
海外進学を勧める指導はしておらず、3名ともがマレーシアの大学へ進むことになったのはあくまで結果であるが、柔軟に授業内で生徒が必要とする支援を行うことができた点で、この科目の目標はある程度達成されたと考える。

(2) まとめ

上記の6つのプロジェクトの総括として風越高校が目指す10の学習者像に生徒がどれだけ近づけたのかを以下のグラフにまとめた。到達状況のこのグラフは生徒に行ったアンケートの質問項目を10のカテゴリーに振り分け、その平均値をパーセンテージで表示したものである。70%を目標ラインと設定したところ、5つの項目で目標を達成することができた。この到達度調査は今年度初めて実施したものであるため、5年間の生徒の成長度合いを示したものではないが、5年目の研究最終年において、半分の項目で風越高校の目指す10の学習者像に近づけたことは研究の成果と言える。これはF-単元計画やルーブリック評価、新学校設定科目などの風越高校独自の教育プログラムの開発と実践が育てたい学習者像を最初に意識してプロジェクトを進める、逆向き設計の発想で研究を進めてこられたからである。以下のグラフの数値には表れていないが、今年度の卒業予定者で海外大学に進学する生徒が3名出たのも、留学する生徒を増やすことを目的に新学校設定科目のカリキュラムの開発や留学支援をしてきたのではなく、広い視野を持って、困難なことにも挑戦しようとする姿勢が身に付くことを意識して研究と実践を進めてきた結果であると考えられる。来年度以降は6つのプロジェクトの実践とアップデートを通じて、今年度は惜しくも目標数値を越えられなかった学習者像が生徒の中で育つように教育活動を行っていききたい。また、今後もこの調査を実施することで風越生の成長を記録し、その指導に活かしていきたいと思う。

飯田風越高校の目指す10の学習者像到達度

※達成目標は70%以上
※赤線は未達成のもの



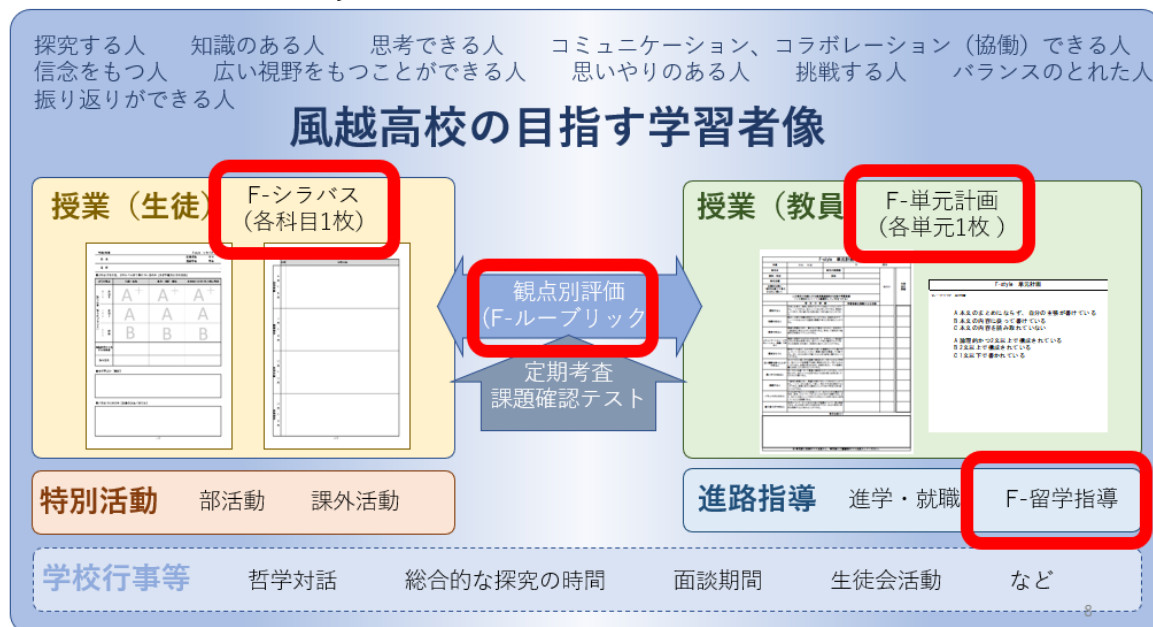
4 研究開発と学校全体の教育活動の改善・改革との関連づけ

従来の高校教育では、年間を通して膨大な量の教科書の内容をいかに詰め込むのかということから授業の計画がなされ、どれだけ正確に頭の中に詰め込まれたのかを定期テストをもとに評価してきた。しかし、コロナ渦を期に急激に発展したオンライン技術によりグローバル化はさらに進行し、知的作業を代行してくれる AI の出現は社会の変化を加速させた。このような変化の激しい社会で生き抜くために学習者が身につけるべき資質・能力は従来の知識偏重型の教育では育てることが難しくなってきた。そこで現在は、自分事としての学びを積み重ねることで、問いを立て解決する力を養うことが学校現場では求められるようになってきた。これは社会に出て問題に直面した時、物事の本質を理解して解決策を探究し、問題を解決する姿勢や能力が必要とされるからである。こういった昨今の社会状況を理解しつつも、本校は従来の知識重視型の教育から抜け出せず、風越高校は以下の 4 つの課題を抱えていた。1 つ目は授業と評価が一体化していないことである。教える内容やそれをテストまでにこなすことが重視され、授業でどんな力を身に付けさせたいのかを授業前に確認することをあまりしてこなかった。また、どんな力を身に付けさせたいのかが明確でないため、単元終了後に生徒の到達度を評価する方法や内容も検討してこなかった。そのため、授業と評価は一体化しておらず、従来の知識伝達型の授業と知識の確認テストのループから抜け出せないでいた。2 つ目は、生徒の学習到達度を評価する方法をペーパーテストに大きく依存し、学んだ知識や技術を実践するパフォーマンステストが限られた科目でしか行われてこなかったことである。知識や技術は普段の生活やこれからの人生の中で実践するからこそ学習内容を実感できるはずなのに、この部分が本校の教育実践には不足していた。3 つ目は、パフォーマンステストの統一された評価基準がないことである。これは本校でのパフォーマンステストの実践が少ないことにも原因があるのだが、パフォーマンステストを評価する統一された基準がないため、教員間で評価に差がでる可能性があった。そのため、自分の評価に対して不安を感じる職員もいた。4 つ目はグローバルな社会で活躍する人材を育成する必要があるながら、海外大学進学支援プログラムが確立していないことである。高校在学中や高校卒業後に海外留学を希望する生徒がそのモチベーションを維持して、留学準備を進めるための支援が必要であったが、基本的には担任の職員と生徒だけが中心となって手続きや準備を進める体制であった。

そのような中、本校は県立高校「未来の学校」構築事業の実践校に指定され、「国際的な教育プログラムを研究する」というテーマのもとに研究を開始する。まずは国際バカロレア、通称「IB」を理解することから研究は開始した。そして、研究を進めていくうちに、先ほど述べたような本校の教育課題が改善される可能性を大いに秘めた教育プログラムであることが分かった。IB の教育システムを現行の日本の教育制度にそのまま取り入れることは難しいため、IB の教育プログラムの良いところを参考にして本校の教育活動に活かせるように研究を進めきた。その結果、以下のような風越高校独自の教育プログラム、通称「F-Style」を開発した。IB には育てたい 10 の学習者像が存在し、IB の授業などを実践する際にはどの学習者像をどのように育てたいのかを事前に明確にしたうえで授業計画などを作成する、いわゆる「逆向き設計」の授業が基本となっている。本校でもそれを参考にして風越高校の目指す 10 の学習者像を設定し、本校で実践される授業や学校行事は育てたい学習者像を設定したうえで、計画や準備が行われる逆向きの設計になるように整備してきた。その研究成果は「3 最終年度の研究開発計画（令和元年

度策定)における目標や目的の達成状況について」に詳述されているのでここでは省略するが、今まで別々に計画・実践されてきた本校の教育活動が10の学習者像を中心に、一貫性をもつようになった。今後もF-styleの実践とアップデートを繰り返し、本校が抱える課題の解決を図っていききたい。

F-Style (飯田風越高等学校独自の教育プログラム) 全体像



5 研究開発で明らかになった課題及び改善方策

研究するなかで課題として挙げられるのは以下の3点である。1つ目はこれまでの研究成果や実践などが本校職員や新任の職員に十分に浸透していなかったことである。そこでこれまでの本校の研究成果をGoogle Sitesにまとめ、本校職員が閲覧し理解を深め、実践に協力してもらえるように職員会などで周知をした。その甲斐もあって今年度の職員アンケートでは90%の職員がこの研究に関する情報共有が十分にされていたと回答した。今後もこのウェブサイトを活用して研究の成果を職員に周知するとともに、授業実践や授業改善の一助になるようにしていきたい。

【風越高校の研究成果をまとめたウェブサイト】



逆引き設計の授業とは？

ウィキペディアとマクタイという人もが提案した理論です。「逆引き設計」の授業では授業前に目標を明確にし、評価方法を決定、そこから授業計画を立てています。具体的には以下のような手順で授業を設計します。

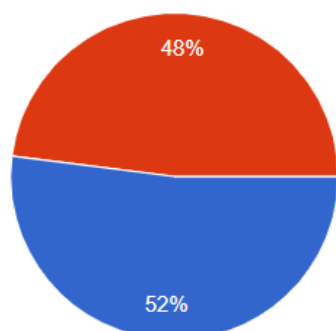
①求める結果を明確にする

→生徒に身につけさせたい力を考えます。授業を通じて知識や思考力、表現力を身につけるために「**どんなことを学ばせたいのか、あるいは考えさせたいのか**」を事前に確認しておくことは教員にとっても役立つはずです。

②確認できる証拠を決定する

→生徒にその力が身につけているのかをどのような方法で評価するの考えます。評価のためにはペーパーテストだけでなく、**パフォーマンス**なども取り入れられるといいかもしれません。また、評価方法として**ルーブリック**評価を適用すると学習の動機づけと方向付けになります。

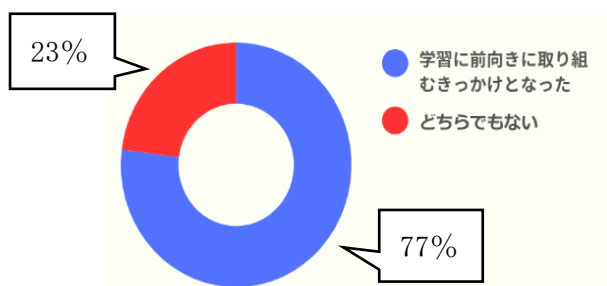




F-単元計画やルーブリック評価など、未来の学校事業に関する本校の実践や成果などは教員間で共有されていたと思いますか？

- 十分に共有されていた
- ある程度共有されていた
- 共有されてはいない

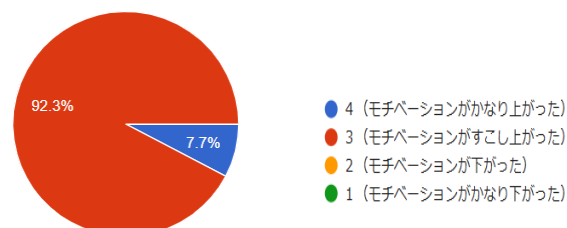
2つ目は、生徒の主体性の高め方である。生徒の主体性を高めることはこの研究を進める中で課題であった。そこで今年は学習への主体性を高めるためにルーブリック評価とパフォーマンステストの2点の改善に着目をした。今までのルーブリック評価は生徒に事前に周知することで学習の方向付けができるというメリットがあった。また、職員にとっては逆向きの授業を設計できるという利点があった。今年はそれをさらに進化させるためにルーブリック評価表の作成に生徒も関わってもらったようにした。アンケート結果からもわかるようにルーブリック評価の作成に関わってもらったことで生徒が学習に主体的に取り組むきっかけとなった。



ルーブリック評価に生徒の皆さんの意見を反映させることに関してどのように感じましたか？
(アカデミックスキル2年生へのアンケート)

さらに今年は、生徒の学習への主体性を高めるためにパフォーマンステストで文脈を与えるということを実践した。これは真正性のあるパフォーマンステストにはスキルを活用する実際の場面設定（文脈を与えること）が必要であるからだ。国際教養科の2年次の選択科目であるアカデミックスキルでは生徒が学びたいと思う海外大学についての英語のプレゼンテーションを実施した。この課題を生徒に説明する際には、プレゼンテーションを相互評価し上位3名には風越高校独自の通貨で奨学金を賞与すると伝えた。プレゼンテーション終了後に行ったアンケートでは受講者全員がこの場面設定により、課題に対して意欲的に取り組めたと回答している。今後もルーブリック評価とパフォーマンステストでの文脈設定を活用して生徒の学習への主体性を高められるようにしていきたい。

奨学金選考会という設定はプレゼンの準備や当日のパフォーマンスのモチベーションに影響を与えましたか？
(アカデミックスキル2年生へのアンケート)

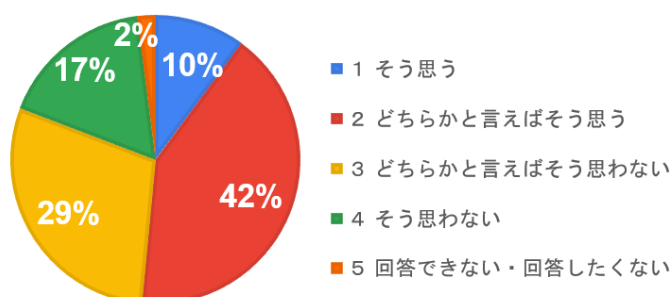


また、今年度実施したアンケート調査では、地域社会やグローバルな問題について考える積極性や、そういった問題を解決していこうという主体性が低いことが分かった。そのため、今後は

身の回りの問題に関して注意や関心を向け、解決していこうという姿勢を学校教育全体で育てていく必要がある。本校の国際教養科ではグローバルな人材を育成することを一つの目標としている。これは世界や日本国内で起こっている問題に着目し、自分や自分の住んでいる地域社会とどのように関係しているのかを調査し、解決策の探究をしていく姿勢を育むことである。そのためには、学校設定科目である「世界の中の日本」のように自分を取り巻く社会や世界に注意を向け、その問題と自分や自分の住む地域に対する影響やつながりを考える習慣を身に付ける必要がある。今後は「世界の中の日本」以外の授業でも時事問題を各教科独自の視点で取り上げながら、特定の教科の枠にとどまらない多角的な視点や考え方を育成する授業実践が必要である。また、その際に重要になってくるのが本質的な理解である。自分が住んでいる地域とは遠く離れた場所で起きた問題のつながりを考えるためには、そこにある本質的な問題の理解が必要である。表層的な理解では、世界で起きている問題の原因を理解して、解決策を考えることは難しい。F-単元計画を作る際に核となる本質的な問いの設定を通じて、物事の本質を理解しようとする習慣や姿勢を生徒に身に付けさせていく必要がある。つまり、生徒が地域社会に対する問題に目を向け、解決していこうという主体性を身に付けるためには、多様な視点で物事を考える習慣と物事の本質を理解しようとする姿勢の両方を様々な授業で育成していく必要がある。そのためには「世界の中の日本」の授業を来年度は本校のより多くの先生方に参観をしてもらい、それぞれの授業実践の参考にしてもらう必要がある。また、上記で説明した本校の研究成果をまとめたウェブサイトを一読してもらうことで、F-単元計画や本質的な問いの理解を深め、実践してもらうことで実践例をさらに増やして授業をアップデートしていく必要がある。

3つ目の課題は学習の振り返りの習慣である。生徒に対して行ったアンケートでは約半数の48%の生徒が学習の振り返りや学習方法に課題を感じていること回答した。風越高校の目指す10の学習者像には「振り返りのできる人」があることからこの部分に着目し、学習の振り返り能力（メタ認知能力）と生徒の成績の相関について調査を行った。その結果、メタ認知能力テストの結果と本校の生徒の成績には若干ではあるが相関関係が見られた。成績と相関関係があったのは、「自分の得意と不得意なことに対する自己理解」や、「重要な事柄と思われる内容が出てきたらペースを落として注意を向けるようにする」などの項目であった。学習に躓きを感じている生徒のこういった部分を支援することは効果的な学習支援につながる可能性がある。今後の課題としては前述の支援をすると同時に、各授業で学習を振り返る時間を取ることや、どのように振り返ることが効果的な振り返りになるのかについて検討をしていく必要がある。

学習プロセスを振り返り、よりよい学習方法を選択する。どの程度身についているのか教えてください。



6 次年度以降の成果普及の取組と自走計画

本校の研究成果普及の取組として F-単元計画の普及を行っていききたい。F-単元計画のエッセンスは4つある。1つ目は育てたい学習者像から逆算して授業や行事を計画できるところである。これは教科書の内容をこなすことに終止しがちな知識伝達型の授業を改善するきっかけになる。2つ目は指導と評価の一体化である。F-単元計画には授業で使ったルーブリック評価を張り付ける部分がある。こうすることで、評価までを1つのユニットとして考えて授業を逆向きに設計できる。また、ルーブリック評価は学習の方向付けと到達度の把握という点からみても生徒に持ってもメリットがある。3つ目は本質的な問いである。本質的な問いとは単元を通し問いつづける、答えがひとつに決まらないテーマで、個人のものの考え方に繋がるような問いのことである。生徒はこの問いを通じて学習内容を自分事として捉えて思考し、グループワークなどの活動を通じて他者の意見を参考にしつつ、新しい視点の発見や相手の意見に耳を傾ける柔軟な姿勢を身に付けていく。4つ目は学校目標の精選である。F-単元計画の良いところは、各学校にある様々な学校目標を精選させ、本当に必要な目標を特定の数に絞ることができるという点である。逆向き設計の根幹である目標の設定は学校運営で力を入れるべき点を学校全体で考えるきっかけとなる。今後はこのエッセンスが詰まった F-単元計画の普及を本校職員の初任者研修や10年研修などの法定研修の際に作成してもらい、学内や学外の学校関係者に周知を図っていききたい。

これまでの研究を今後自走させていくために以下の2点を主に行っていききたい。1つ目は、生徒を巻き込んだ取組にすることである。これまでの研究は職員主導で実践することが多かった。この研究が自走していくためには生徒の主体的な取組も必要となってくる。そこで生徒会の役員と話し合い、生徒総会の議案書に10の学習者像について記載してもらうようにした。具体的には委員会の通年の活動や文化祭の係活動でどんな学習者像を目指して活動をしたいのかを書くように議案書をアップデートしてもらった。このように生徒が主体的に学習者像に近づこうとするきっかけを作ることで、この事業が生徒とともに自走していけるようにしていきたい。

現在の議案書

令和6（2024）年度 前期活動報告書

新田風館高校生徒会

本部 委員会	長 〇年〇組	
	副 〇年〇組	
	副 〇年〇組	
	副 〇年〇組	
	顧問	

1. 令和6年度前期活動目標（とくに意図的に取り組もうとしたこと）

輝 ~個性という名の光を集めて~

2. 主な活動の報告（その成果・反省も）

・生徒会活動のことを第一に考え、意見を取り入れ、相談にのって考えたり、そのほか、学校生活に役立つ活動も行った。だが、行事活動との連携が不十分だったこともあった。

・視野を広く持ち、生徒と地域が関わるようなことに積極的に取り組んだ。

new議案書(案)

1. 令和6年度後期活動計画（生徒会本部）

全生徒と協働して広く開かれた、価値ある議論を行い、よりよい学校を作る

目指すべき学習者像
④

2. 令和6年度後期活動内容（生徒会本部）

改定したい校則等の様々な意見を募って生徒総会で議論し、生徒の意見が反映されるように努力する。また、公式ラインを活用して生徒の意見を常時集め、開かれた議論ができるようにする。

2つ目は、実践の蓄積とアップデートである。本校の研究における課題として、職員にこの研究の成果や実践が周知されていないということがあった。こうした状況を改善し、さらなる実践を増やしてもらうためにも、本校の研究をまとめたウェブサイトを今後もアップデートし続け

ることで研究内容の理解を深め、さらなる実践に活かしてもらいたいと考えている。これまでの素晴らしい実践が過去のものにならないように職員会などでも適時共有することでこの研究とその成果が風越高校のレガシーになるようにしていきたい。

7 令和6年度（最終年度）の事業実施体制

(1) 令和6年度の研究開発の実績

① 取組の到達目標(又は仮説)、実施(活動)日程及び内容				
【目標】 地域に根ざしたアイデンティティとグローバルな視野をもって、地域や世界の未来を創造できる人を育成するために、国際的な教育プログラムの長所を生かした飯田風越独自のカリキュラムや学びの指導・評価方法を研究開発するとともに、学びの成果を活かしながら、海外大学進学を実現するためのプログラムと支援体制を構築する。 【実施(活動)日程及び内容】 「(6) 項目別実施時期・期間」参照				
② 目標の進捗状況、成果、評価・検証				
以下は今年度初めに作成したルーブリック（評価表）をもとに行った R6 年度のプロジェクトごとの評価である。プロジェクトごと順番に今度の進捗状況や成果などについて説明していく。				
番号	実施(取組)項目	十分な成果	前進	現状維持
(1)	F-教科指導・ 単元計画	授業や行事において、F-単元計画に基づく指導が行われ、学習者像の達成度を振り返り、分析をした上で授業に活用できている。	授業や行事において、F-単元計画に基づく指導が行われ、学習者像の達成度を振り返り、分析することができている。	授業や行事において、F-単元計画に基づく指導が行われ、学習者像の達成度を確認することができている。
(2)	F-ルーブリック・ 観点別評価	授業内テストおよび各単元においてルーブリックを使用し、観点別評価を生徒にフィードバックできている。	授業内テストおよび各単元においてルーブリックを使用し、観点別評価との整合性を検証することができる。	授業内テストおよび各単元においてルーブリックを使用し、検証することができる。
(3)	F-進路指導・ 留学指導	留学に関心のある生徒をサポートする体制が整い、生徒が国内外問わず進路実現に向けて主体的に行動を起こすことができている。	留学に関心のある生徒をサポートする体制が整い、多くの生徒が海外進学を現実的な進路の一つとして意識することができている。	留学に関心のある生徒をサポートする体制が整っているが、あまり生徒が利用できていない。
(4)	新学校設定科目 「世界の中の日」	改善を加えた授業を行い、その成果と課題をふ	改善を加えた授業を行い、その成果と課題をふ	改善を加えた授業を行い、その成果と課題が明

	本」	まえ、来年度に向けて指導・評価方法の再検討が具体的に進んでいる。	まえ、来年度に向けて指導・評価方法の再検討に着手している。	らかになっている。
(5)	新学校設定科目 「アカデミックス キル」	改善を加えた授業を行い、その成果と課題をふまえ、来年度に向けて指導・評価方法の再検討が具体的に進んでいる。	改善を加えた授業を行い、その成果と課題をふまえ、来年度に向けて指導・評価方法の再検討に着手している。	改善を加えた授業を行い、その成果と課題が明らかになっている。

◇ F-教科指導・単元計画

昨年度までに作成された単元計画書（資料①②）を用いて授業実践・振り返りを前期と後期の2期に分けて実施した。単元計画書を用いた実践は、昨年度13件であったが、本年度は実践を繰り返し、25件の実践を行うことができた。単元を計画する段階での教員の授業像と単元終了時の生徒の感想・自己評価を照合することで「飯田風越高校10の学習者像」に対して生徒の学びの結果が可視化されるため、授業改善に関して十分な成果があったと言える。実践結果は学校の共有フォルダに保管することによって全職員が他の職員の作成した単元計画書を閲覧できるようにした。このことによって、本校の研究開発の目的である「教職員が指導・研究を通して体験する研修の一環としても捉え、研修機会が限られる現職の教職員にとって教育手法や教育観をアップデートする好機とする」という目的も果たすことができた。

「本質的な問い」を各単元に組み込むことによって、本校がIBから取り入れようと考えた「学習者像」と「概念学習」の定着に向かうことができた。本校の「10の学習者像」については今までの単元計画書でも確認できるが、教科の枠にとらわれず、学校教育全体で社会で生きる力を養うという観点では、今年度のループリックと合わせることで学校の勉強を超えた社会的な力を計る指針になり得たのではないかと考える。また、本年度も昨年度同様、授業における実践だけではなく、生徒会活動や文化祭に関しても単元計画書を用いて社会的に生きる力の伸長を評価した（資料③）。

資料④は本年度の実践結果をまとめたものである。授業における使用例と行事における使用例を確認することで、本校の教育活動全体を通して、生徒がどのように自分自身の学びを自覚しているかが読み取れる。

生徒の内面に踏み込む評価項目にこの5年間試行錯誤を重ねたが、教育活動全体を通して、生徒がどのように自分の学びを考えているかを可視化できる単元計画書を作成できたのが、大きな成果であったと思う。実践に関しては以下のようになるべく生徒と教員の両者に負担がかからないように努めた。

実施手順

・F-単元計画の作成

授業前にExcelファイルの太線の欄を記入する。（指示内容は資料①を参照。）

・授業実践

・振り返り

- ① 単元の最後の授業時に生徒を対象としたアンケートを授業講座の Classroom に Google Forms 配信し実施する。

質問内容：「飯田風越高校の目指す学習者像10項目のうち、【(単元名)】の単元に身に付いたと思う項目を、1～3個選んでください。」

- ② アンケート結果を、授業前に作成したExcelファイルの二重線の欄に入力する。

- ③ 「ねらい」で選択した項目と、アンケート結果を比較して気になることがあれば「単元を終えて」に入力する。

上記の手順で行えば、職員個人で用意するものは何もないので負担にならない。また、生徒にとっても Google Forms で○を入力するだけなので、実施しやすい。学校教育全体の俯瞰をする際に、データが取りにくかったり、何度も行う際に面倒に思ってしまったりするシステムでは継続性に欠けてしまう、本様式であれば、その面での心配がないので、継続的に実践と分析を繰り返すことができると考える。来年度は本年度までの成果をもとに、誰もが当たり前にこの実践を行えるよう、引き続き周知・実践を繰り返していきたい。

資料①（単元計画）

F-style 単元計画					
対象	令和6年度	3年		A・B・C講座	
単元名	リスク社会とは何か	単元の時間数	7	ねらい	生徒自己評価
教科・科目	論理国語	担当	三石		
単元目標	「近代」の特徴を捉え、「リスク社会」の定義を知る。				
本質的な問い (単元を通じて考えさせたい問い)	リスク社会を私たちはどのように生きるべきか				
この単元で対象にする飯田風越高校の目指す学習者像 (10項目から1～10個選択して✓印をつける)					
	項 目 の 詳 細		学習者像を意識させる活動		
探究する人	好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけることができる。一人でまたは、他の人々と共に学んだりできる。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じて持ち続けることができる。			33.3%	
知識のある人	幅広い分野の知識を探究することができる。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組むことができる。		「近代」のあり方（思想・哲学・社会背景）についてタブレットで調べる。	✓	35.0%
思考できる人	複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用できる。率先して理性的で倫理的な判断を下すことができる。		自分の考えを記述し、他者とすりあわせを行う。	✓	81.7%
コミュニケーション・コラボレーション（協働）できる人	複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現できる。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合うことができる。				3.3%
信念をもつ人	誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動できる。そして、あらゆる人々が持つ尊厳と権利を尊重して行動できる。また、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもつことができる。				3.3%
広い視野を持つことができる人	自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めることができる。多様な視点を求め、価値を見出し、その経験を糧に成長しようと努めることができる。		自分の考える「リスク」と他の人が考える「リスク」を比較する。	✓	63.3%
思いやりのある人	思いやりと共感、そして尊重の精神を示すことができる。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動できる。				6.7%
挑戦する人	不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合うことができる。一人で、または協力して新しい考えや方法を探究することができる。挑戦と変化に機知にとんだ方法で快活に取り組むことができる。				6.7%
バランスのとれた人	自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解できる。また、私たちが他の人々や私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識できる。				5.0%
振り返りができる人	世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察できる。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めることができる。		全て読み終えた後に、全体の論理構造を振り返り、ノートにまとめる。	✓	6.7%
単元を終えて					
今回の授業では、始めに本質的な問いとして設定した「リスク社会を私たちはどう生きるべきか」を生徒に提示して、本文を読み進めた。グループで考える時間では、いつもより自分達の経験に即した話が多くなされており、統一したテーマ設定に効果を感じた。「知識」と「思考」については論理国語の性質上伸びやすいが、今回は他者の意見を踏まえる活動を多くしたため、「広い視野」の部分も意識させることができた。 ループブックについては本質的な問いに関して記述した生徒の答案を評価した。「リスク社会」という本文の定義についてあまり触れられず、イメージとしての「リスク」について記述したものが多く、条件の提示が甘かったという反省が残った。解答の型が十分に理解できないまま進めてしまったので、次回は記述解答の型を確認した上で本質的な問いの考察を行っていきたい。					

資料①裏面（ループリック）

F-style 単元計画	
(ループリック 貼付欄)	
A 本文のまとめにならず、自分の主張が書けている B 本文の内容に従って書けている C 本文の内容を読み取れていない	
A 論理的かつ2文以上で構成されている B 2文以上で構成されている C 1文以下で書かれている	

資料②（単元計画書）

F-style 単元計画					
対象	令和6年度		2年1・5組 2年3・4組 マット運動選択者 講座		
単元名	器械運動(マット運動)		単元の時間数	13時間	
教科・科目	体育		担当	菅沼 孝太	
単元目標	発表に向けて、技の精度を高めるために工夫して練習する。				
本質的な問い (単元を通じて考えさせたい問い)	どのようにして、新しい技を安全に習得することができるようになるのか。				
この単元で対象にする飯田風越高校の目指す学習者像 (10項目から1～10個選択して✓印をつける)					
	項 目 の 詳 細		学習者像を意識させる活動		
探究する人	好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけることができる。一人でまたは、他の人々と共に学んだりできる。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じて持ち続けることができる。		実技の練習 活動の振り返り (スプレッドシート)		
知識のある人	幅広い分野の知識を探究することができる。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組むことができる。				
思考できる人	複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用できる。率先して理性的で倫理的な判断を下すことができる。		実技の練習 活動の振り返り (スプレッドシート)		
コミュニケーション・コラボレーション(協働)できる人	複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現できる。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合うことができる。		実技の練習		
信念をもつ人	誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動できる。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動できる。また、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもつことができる。				
広い視野を持つことができる人	自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めることができる。多様な視点を求め、価値を見出し、その経験を糧に成長しようと努めることができる。				
思いやりのある人	思いやりと共感、そして尊重の精神を示すことができる。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動できる。				
挑戦する人	不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合うことができる。一人で、または協力して新しい考えや方法を探求することができる。挑戦と変化に機知にとんだ方法で快活に取り組むことができる。		実技の練習		
バランスのとれた人	自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解できる。また、私たちが他の人々や私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識できる。				
振り返りができる人	世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察できる。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めることができる。		活動の振り返り (スプレッドシート)		
単元を終えて					
・単元の開始時に生徒の意見も反映させてルーブリックを作成・提示したことで、自発的に活動に取り組む生徒が多くみられた。特に、「難易度の高い技に挑戦する」姿を評価に入れたことで、振り返りにおいても、生徒が意識していたことが顕著に出ていた。					
・使えるマットの枚数が限られていたため、もっと練習したいという生徒にとっては物足りなさがあったと思われる。選択種目であったため、上限人数をもっと減らすことでさらに活動の幅を広げられたかもしれない。					

資料②裏面（ループリック）

F-style 単元計画			
2年生 マット運動 ループリック			
知識 知識の評価に変わるループリック			
3	2	1	
知識 自分の能力に応じた課題を設定し、課題を達成するための適切な練習方法を選択することができるだけでなく、友に対して効果的な練習方法を提案することができる。	知識 自分の能力に応じた課題を設定し、課題を達成するための適切な練習方法を選択することができる。	知識 自分の能力に応じた課題を設定することができず、課題を達成するための適切な練習方法を選択することができない。	
技能 技能の評価に変わるループリック			
3	2	1	
技能 撥転技群、ほん転技群、平均立ち技群からバランスよく技を選択して組み合わせ技を構成するとともに、技の難易度に応じて演技のテンポを変えるなどの工夫がみられる。	技能 撥転技群、ほん転技群、平均立ち技群からバランスよく技を選択して組み合わせ技を構成し、一定のテンポで滑らかに安定して演技ができている。	技能 撥転技群、ほん転技群、平均立ち技群のいずれかに偏りがみられたり、滑らかさや安定さを欠いた演技となったりしている。	
思考力・判断力・表現力 思考力・判断力・表現力の評価に変わるループリック			
3	2	1	
思考力・判断力・表現力 自分や仲間動きを分析し、良い点や修正点を指摘するだけでなく、自分や仲間の新たな課題を発見し、その課題を解決するための練習計画を立てている。	思考力・判断力・表現力 自分や仲間の動きを分析し、良い点や修正点を指摘している。	思考力・判断力・表現力 自分や仲間の動きを見ていなかったり、良い点や修正点を指摘しなかったりしていない。	
主体的に学習に取り組む態度 主体的に学習に取り組む態度の評価に変わるループリック			
3	2	1	
主体的に学習に取り組む態度 危険予測をしながら常に安全を確保し、自分や仲間の課題に応じた課題や挑戦を大切にしっかりと、良い演技を講えたり、練習計画を見直ししたりして再めあおうとしている。	主体的に学習に取り組む態度 危険予測をしながら常に安全を確保し、自分や仲間の課題に応じた課題や挑戦を大切にしようとしている。	主体的に学習に取り組む態度 危険予測に対する意識が低く、安全を確保しておらず、器械運動の学習に主体的に取り組もうとしない。	

(資料③)

F-style 単元計画					
対象	令和6年度	全校		ねらい	生徒 自己 評価
単元名	風越祭	単元の時間数	3日		
教科・科目	生徒会主催	担当	吉沢 圭祐		
この単元で対象にする飯田風越高校の目指す学習者像 (10項目から1～10個選択して✓印をつける)					
	項 目 の 詳 細				
探究する人	好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけることができる。一人ではたは、他の人々と共に学んだりできる。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じて持ち続けることができる。			✓	9.10%
知識のある人	幅広い分野の知識を探究することができる。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組むことができる。				9.10%
思考できる人	複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用できる。率先して理性的で倫理的な判断を下すことができる。				36.40%
コミュニケーション・コラボレーション（協働）できる人	複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現できる。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合うことができる。			✓	72.70%
信念をもつ人	誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動できる。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動できる。また、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもつことができる。				9.10%
広い視野を持つことができる人	自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めることができる。多様な視点を探る、価値を見出し、その経験を糧に成長しようとする努力ができる。			✓	63.60%
思いやりのある人	思いやりと共感、そして尊重の精神を示すことができる。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちが取り巻く世界を良くするために行動できる。			✓	9.10%
挑戦する人	不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合うことができる。一人で、または協力して新しい考えや方法を探究することができる。挑戦と変化に機知にとんだ方法で快活に取り組むことができる。			✓	63.60%
バランスのとれた人	自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解できる。また、私たちが他の人々や私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識できる。				9.10%
振り返りができる人	世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察できる。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めることができる。			✓	0.00%
単元を終えて					
風越祭実行委員長、係長に対して実施した。風越祭の目的として、「計画立案から総括まで創造的思考できる人」、「知恵を出し合い協力し合う人」、「来校者の気持ちに寄り添える思いやりの心」を養うことをあげていることから、F-style単元計画では「思考できる人」「コミュニケーション、協働できる人」「広い視野」「思いやり」を行事のねらいとした。 結果として「コミュニケーション」「広い視野」が高い自己評価となった。通常の授業では、「知識」「思考」に評価が偏りがちであるが、生徒会行事はいわゆる非認知能力を養うために大変重要な取り組みであることが結果からもうかがえる。					
※ 単元前に太枠のマスを記入し、単元後に二重線枠のマスを記入してください。					

(資料③裏面)

F-style 単元計画			
(ループリック 貼付欄)			
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学びに向かう態度
A	昨年の資料も参考にして自分の担当する係の仕事の内容も理解した上で準備を行うことができた。また、文化祭の準備に必要な計画や物品も昨年の資料も参考に入念に考えて、文化祭までに準備もほぼ完ぺきに終えることができた。 文化祭終了後には来年度のための引継ぎの資料も作成した。	昨年の資料や反省も踏まえて今年の係活動の計画を立てることができた。また、予想される問題も事前に予測し、それに対する対策も考えることができた。係活動をする際には係の生徒が仕事を理解しやすいようにわかりやすい資料なども用意した。	顧問の先生や同じ係の生徒と協力して文化祭の準備や計画も自主的に進めることができた。また、自分の係以外の仕事にも目も向けるなど、他の生徒と協働して文化祭の準備を進めることができた。
B	文化祭の準備に必要な計画や物品も昨年の資料も参考にして考えることができた。また、文化祭までに必要な準備も完了させることができた。文化祭終了後には今年度の資料もまとめて来年度に引き継ぐ予定である。	係活動に必要な計画も立てることができた。また、係活動をする際には同じ係の生徒がわかるように資料なども用意して説明も行った。	顧問の先生の助言のもと、準備や計画を進めることができた。また、文化祭も無事に開催できるように同じ係の生徒と協働して文化祭の準備を進めることができた。
C	文化祭の準備に必要な計画や物品も事前にまとめることができた。また、文化祭までに必要な準備も最低限は完了させることができた。文化祭終了後には今年度の反省も行った。	係活動に必要な計画も立てることができた。また、係活動もまとめた資料も係の生徒に配布した。	文化祭の準備や計画を進めることができた。また、文化祭も無事に開催できるように最低限の仕事は行うことができた。

(資料④)

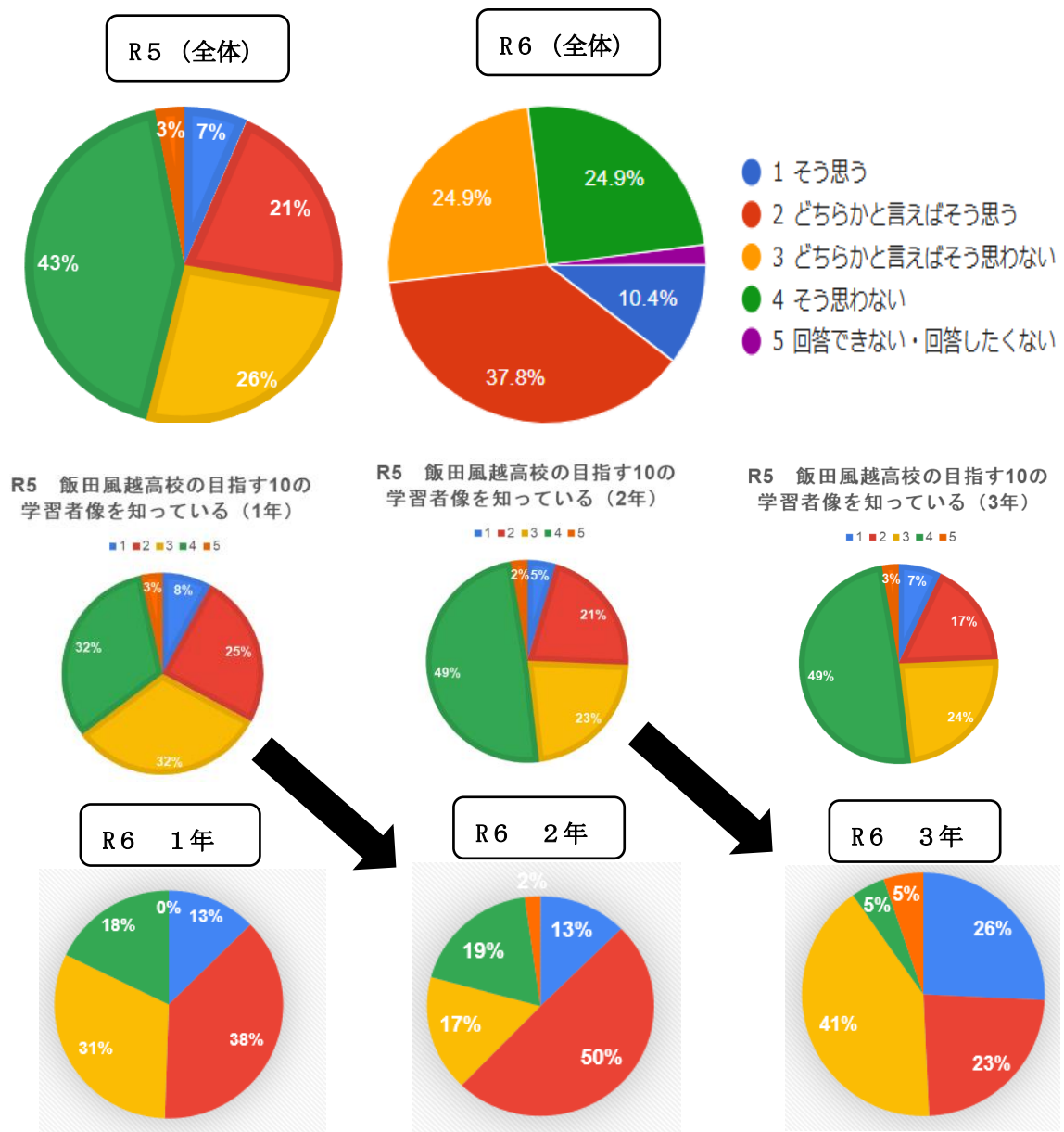
社会で生きる力から逆算した指導

F-単元計画実践結果

授業における実践20例																				行事における実践5例				
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	①	②	③	④	⑤
探究	○	○			○	○	○		○	○	○	○			○	○	○	○	○					
知識		○	○	○		○	○					○	○	○	○	○	○	○	○					
思考	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
協働				○	○		○			○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
信念									○															
広い視野	○	○	○												○	○	○		○	○	○	○	○	○
思いやり																○				○	○	○	○	○
挑戦					○		○			○	○	○				○	○			○	○	○	○	○
バランス									○															
振り返り		○	○		○	○	○			○	○	○	○						○	○		○		

○：伸ばしたい部分（事前設定）
 青：50%以上 赤：10%以下
 （「意識できた」と回答した率）

また、このプロジェクトの成果を見るために、全校生徒に対して調査を行った。質問項目は、「飯田風越高校の目指す10の学習者像を知っている」とした。同様の質問をR5年度も行っており、その比較も含めて検証を行った。

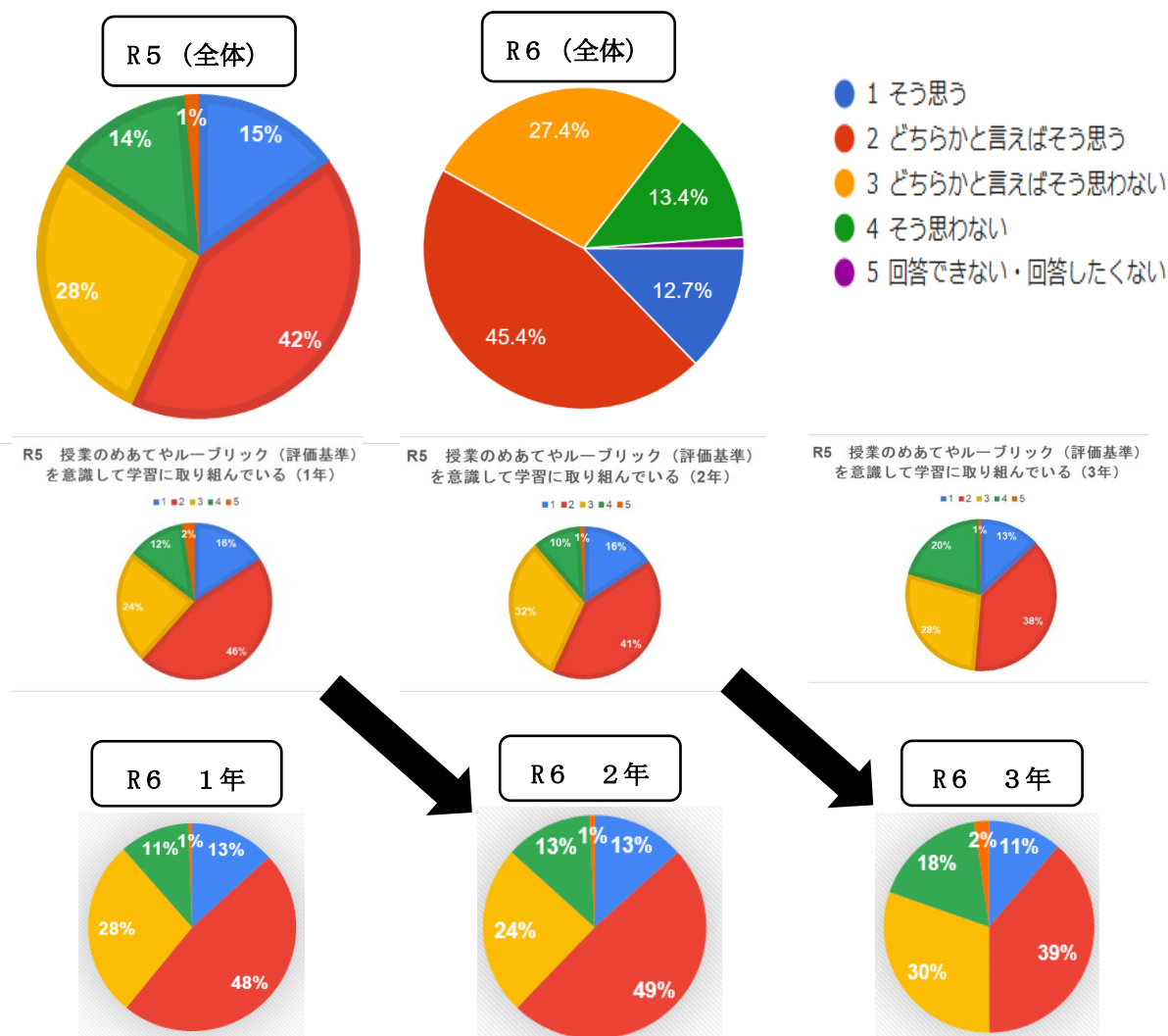


今年度行った全校生徒に対するアンケートの調査では「1 そう思う」、「2 どちらかというと思う」の回答が約28%から約48%へと大幅な増加があった。また、2年生と3年生の前年度比の調査から生徒の中に10の学習者像が浸透してきているのがわかる。また、今年度の1年生のアンケート結果も現2年生が1年生の時の調査結果よりも「1 そう思う」、「2 どちらかというと思う」の回答が多かった。これは昨年までの取組の成果であるとともに、今年度の本校職員がF-単元計画を活用した授業や行事を積極的に実践してくれた結果であると考えられる。

◇ F-ループリック・観点別評価

ループリックがどの程度生徒に浸透したのかを調査した。質問項目を「授業のめあてやループリック（授業評価）を意識して学習に取り組んでいる」とした。なお、そう答える理由も自由記述式で回答させている。また、同様の質問をR5年度も行っており、その

比較も含めて検証を行った。



今年度実施したルーブリック評価が、学習への取組に影響を与えているかについてのアンケート結果は、昨年度の「1 そう思う」、「2 どちらかといえばそう思う」の解答合計の57%から58%と、若干の増加傾向が見られた。アンケートの結果からすでに生徒の半数以上はルーブリックに記載されている記述内容に注意を向け、それを意識した学習ができていることになる。各学年の追跡調査からは、若干の増加傾向がみられる学年と減少傾向のみられる学年があることがわかった。全体として大きな増加傾向が見られなかったのは、各教科と科目の特性上、ルーブリックを用いた評価を毎回の授業で使うわけではないことが挙げられる。教員にとっては、ルーブリック評価は逆向き設計の一環として生徒に身に付けさせたい力を事前に考え、到達度や成長を公平に評価できるというメリットがある。生徒にとっては、授業において学ぶべき内容や学習の方向性を理解して授業に取り組めるというメリットがある。ルーブリックを使って生徒を評価することを目的とするのではなく、これらのルーブリック評価の有用性を教員と生徒に周知し、ルーブリック評価の実践を増やしていきたい。

◇ F-進路指導・留学指導

- ・全校生徒対象に海外進学に関する意識調査を実施。海外進学に興味があると回答した生徒用にGoogle Classroom「F-Style Study Abroad」を作成（4月）
- ・留学講座・相談会の案内（4月～1月）
「マレーシア大学進学説明会（本校生徒向け）」、JASSO 奨学金セミナー、留学フェロシップ関連イベント、オーストラリア大学進学情報誌、アメリカ大学進学情報誌など

の周知と配布

- ・FUETSU Global Camp の実施（7月26日）
内容：海外大学進学についての説明、大学紹介、自己分析ワークショップなど
- ・マレーシア大学の指定校推薦についての周知（7月）
内容：本校と提携しているマレーシアの Taylor' s University と Sunway University の指定校推薦についての情報の周知
- ・マレーシア大学進学説明会の動画視聴（11月12日）
内容：マレーシア大学と入試方法等に関する説明
- ・語学研修の際に大学見学をプログラムに入れた。（2022年度から現在まで）

◇ 新学校設定科目「世界の中の日本」

「世界の中の日本」では、①世界と日本の文化に関する調査や体験、考察を通じて、文化の相互作用や多様な価値観を理解する、②日本と世界との関係を歴史的に考察することで日本文化を相対化し、多様な文化と共生する力を涵養する、③過去と現在との文化比較を通じ自らを客観的に見つめる力を身に付け、アイデンティティを確立する、を目標としてシラバスを作成した。

実際に作成した単元計画は以下の通り。

単元名	具体的内容
世界の学校と日本の学校	「日本の学校あるある」を挙げ、それらが世界共通なのか、日本（地域）独自のものなのかを検証。世界の学校との比較を通して「どのようにしたら日本の学校はよくなる可能性があるか」という本質的な問いを立て、テーマごとに解決策を提示。
世界の中の「長崎」	修学旅行先の「長崎」に焦点を当てて、「長崎」から見た世界とのつながりについて見学先を中心にそれぞれが「問い」を立てて探究活動を行う。
メディア・リテラシー	「メディア」について取り上げた番組をもとに、メディアが持つ特性やメディアにふれる人間の習性について理解を深める。また、「オリエンタリズム」の概念についても扱った。
文化の交流	それぞれの国が世界とのつながりの中で新しく生まれた「文化」について各自の関心をもとに考察し、その背景についてレポートにまとめる。
パビリオンを作る	上記に示した「比較」「つながり」「交流・融合・創造」の視点をもとに、自身の関心のある国・テーマに沿ってパビリオンの企画ポスターを制作。

今年度受講した14名の生徒は、全員が国際教養科生であり、海外語学研修を経ているものも多く、世界のことを知りたいという知的好奇心は高いと思われる。発表で使った資料や、個々の理解度を問うレポートについても質の高いものが散見された。また授業に関しては、生徒にとっては難しい内容が含まれているものもあったが、自身の言葉で噛み砕いて説明したり、視野を広げようとする姿勢がみられた。生徒の感想は以下の通り。

<生徒の感想の一部（抜粋）>

- ・日本とオーストラリアで教育の仕方が異なるのは、国によって求められる姿、様子が全然違うからだということが分かった。
- ・自分の予想は的中したけれど、その原因に、今話題になっている社会問題が大きく関わっていることや、税金についても知ることができたので、知って良かったことが沢山知ることができた学習になった。 ていることや、税金についても知ることができたので、知って良かったことが沢山知ることができた。

現在受講している学生は、海外語学研修はじめ、信州つばさプロジェクトなどの様々な留学プロジェクトに参加するようになっている。実際に海外に出る際には、上記に示した「3つの視点」をもとに、多様な価値観を認め合う力が必要になってくる。今回の結果は、「世界の中の日本」でその礎を築くことができたといえる。

☆ 新学校設定科目「アカデミックスキル（2年）」

アカデミックスキル（2年）では、海外大学への進学を視野に入れている生徒のための準備科目として、①自身の内面を深め、自分が学びたいことや自分の将来の夢と海外進学がどのようにつながっているのかを理解する、②海外大学進学後に必要となる英語力や論文作成スキル等を身につけるという2つの目標を設定してシラバスを作成した。週2時間の授業を曜日ごとに2種類に分け、1時間はALTが主導で英語のスキルアップのための授業をティームティーチングで行い、もう1時間は日本人教師が主導で自己理解や進路学習などの授業などを行った。以下は今年実際に行った授業の抜粋である。

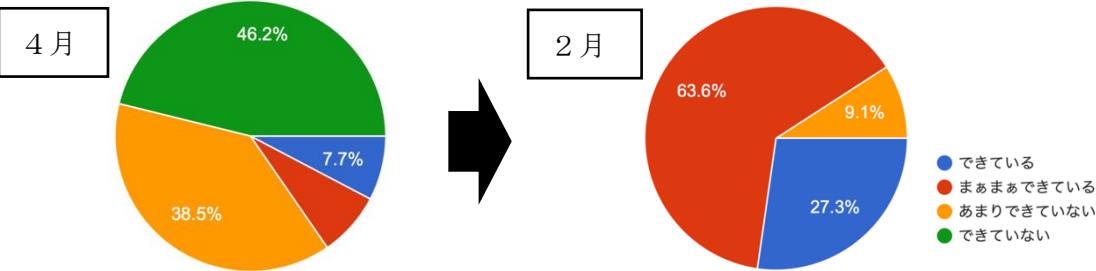
英語スキルアップ系 単元	具体的内容
Taking notes	海外大学の講義では資料が配布されないことも多いため、素早くメモを取るためのコツ、略字、ポイントを押さえてキーワードをメモする
Outlines	文章を読み、要点を押さえて目次のようにまとめる
Online Lectures	TED などさまざまな講演動画を、ノートを取りながら視聴し、Outlineを書く
Presentation Tips	わかりやすいプレゼンテーションの基礎について学び、先の単元で視聴した講演の内容をまとめ、プレゼンテーションする
Presentation about myself	以下の7つのトピックから1つ選び、春学期に学んだスキルを参考にして英語でプレゼンをする。 1. 自分自身の核となるような経験やアイデンティティ、興味、才能に関する体験談 2. 何かに挑戦、挫折、失敗した経験があなたに与えた影響や、その経験から学んだこと 3. 挑戦しようとするときに、どのように考え、挑戦し、結果をどのように受け止めたのか？ 4. あなたが解決した、もしくは解決したい課題とその解決策について 5. 自分自身の成長や、自分・他人に対する新しい理解

	をもたらした経験について 6. 時間を忘れて取組たくなる事柄について
Essay writing	英語エッセイの構成、引用の方法について学ぶ
Critical Thinking	エッセイライティングにつなげるために、複数の記事の読み比べを通して、書かれた意図やメッセージ性、情報の信頼性などについて考える
University Research Project	自分が学びたいことを学べる海外大学を調査し、その大学で学べることや大学の魅力、将来の夢などについて英語でプレゼンテーションを行う
Citation	アカデミックライティングで避けるべき Plagiarism(盗作)とその違法性について学ぶ。また、それを避けるためのスキルである引用(citation)方法について学ぶ
Speaking / Discussion	1 分間モノローグ(一人語り)や、英字新聞の記事についてグループで話し合う
Final Presentation	指定のトピック【Should High school be mandatory in Japan?】に対する自分の意見を述べる。自分の主張をサポートするためには明確な理由と信頼性のある文献が必要となる。各自でそれを探し出し、essay writing や citation lesson など学んだ知識やスキルを活用して説得力のあるアカデミックプレゼンテーションを行う
自己理解と進路学習系 単元	具体的内容
自分はどういう人間か	自己紹介・他己紹介を通して、自分が表現しようとしている自分像が相手にはどう映っているのか、どうすればうまく伝えられるのか考える
自分の好きなものはなにか	自分史を作成し、自分が興味を持っていること・価値があると感じていることを洗い出す
日本の大学で学べることはなにか	理科・国語・体育・社会の教員を特別講師として招き、大学で学んだ内容を模擬講義形式で紹介
Presentation about myself	以下の7つのトピックから1つ選び、春学期に学んだスキルを参考に英語でプレゼンテーションを行う
University Research project	自分が学びたいことを学べる海外大学を調査し、その大学で学べることや大学の魅力、将来の夢などについて英語でプレゼンテーションを行う

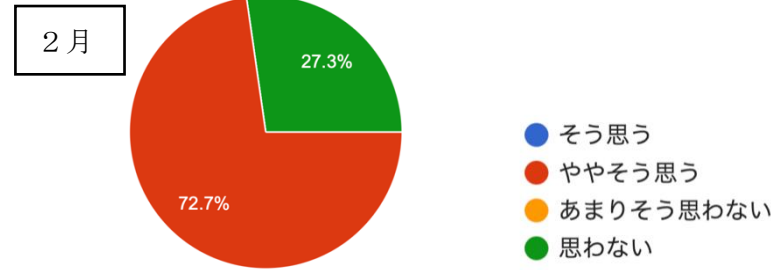
Critical Thinking	日本語の記事の情報の信ぴょう性や比較、利害関係者などを検討し、情報の信頼性やその情報のもつ影響などについて考える
資格試験に挑戦してみよう	海外進学には各種の英語試験を受験する必要がある。多様な検定試験の特徴や受験方法について学び、資格試験で必要とされる英語のレベルを体験する
Final Presentation	指定のトピック【Should High school be mandatory in Japan?】に対する自分の意見を述べる

今年度は国際教養科2年生の14名がアカデミックスキルを受講した。4月に実施したアンケートでは高校卒業後に海外の大学へ直接進学を希望する生徒は1名だった。しかし、11月に行ったアンケートでは、高校卒業後に海外大学進学を希望するという生徒が年度初めの1名から4名に増加した。これは、アカデミックスキルでの学習が海外大学で学ぶことの動機づけや準備につながっていると生徒が実感していることを示唆している。2月に行ったアンケート結果はそれを裏付けている。2年生のアカデミックスキルは当初の目的である英語のスキル学習と自己理解を深める授業を通して、生徒の留学への興味関心を高めることができたと言える。

海外進学に向けて、現時点でどの程度準備ができていると感じますか？



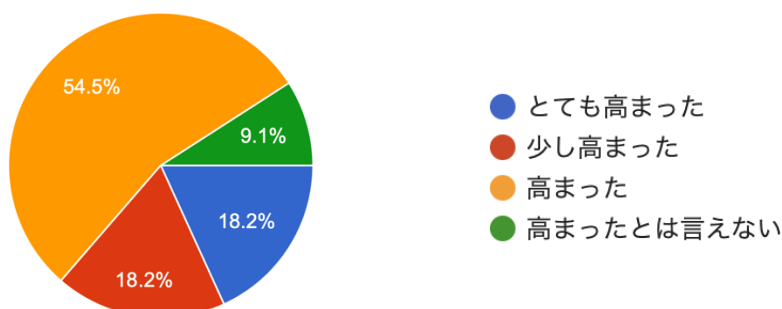
4月と比べて、海外進学への意識やモチベーションは高まりましたか？



また、今年度は留学に必要な英語試験のレベルを体感するために生徒はTOEIC IPテストに挑戦した。受験をするにあたりTOEICの勉強だけでなく、IELTSやTOEFLなどの試験の特徴や勉強も行うことで実用英語技能検定以外の英語の資格試験についても理解を深めることができた。受験後のアンケートでは、90%以上の生徒がTOEICテストの受験を通じて英語のみならず、英語の資格試験について学ぶことができたと回答している。今年度はキャンペーン価格のため割引価格で受験することができた。そのため来年度以降は

受験料の問題から実施できるかはわからないが、外部試験の勉強や受験をきっかけに英語学習や留学への興味関心が高まることもあるため、来年度も引き続き英語の外部試験について勉強する時間を取りたいと思う。

TOEIC やその他の英語の資格試験の勉強を通じて英語学習へのモチベーションが高まりましたか？



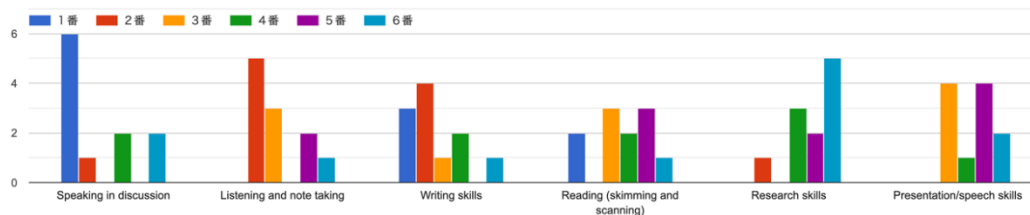
2月に行ったアンケートの自由記述からは、以下に示すようにスキル学習を中心に授業で行ったことが身に付いた実感があると回答した生徒が多く見られた。

この授業でどのような学びや発見などがありましたか？ 【生徒の感想抜粋】

- ・英語の授業だけでは身につけることのできない、英語の活用能力や作文・プレゼンなどの色々な能力を身につけられたこと。
- ・長文を早く読む、スキミングができるようになった。
- ・英語の長い文を大切な部分だけを切り取って要約するスキル、前まで日本語でも要約とか苦手だったけど前に比べたら大切なところをしっかりと見て判断できるようになったと感じる。
- ・プレゼンにおいて重要な見やすいスライドの作り方、ジェスチャーの重要性や速読の鍵となるスキミング、また情報収集に関わるメディアリテラシーを学ぶことが出来た。
- ・人前で発表することに今までと比べると少しだけ慣れた。正しい情報かを見極めるスキルを学ぶことができた。
- ・英語でプレゼンテーションをしたり、話し合うスキルを学べた。
- ・人と意見を交わして新しく自分の考えを構築するととても勉強になった。

来年度への課題は授業内で扱う内容の精選である。来年度の授業計画の参考にするために2月にアンケートを行い、今年度のアカデミックスキル（2年）の授業内で扱ったスキルの中でどのスキルをより学びたいと思ったかについての調査を実施した。その結果、生徒たちが一番学びたいと回答したのは、ディスカッション内でのスピーキングスキル（意見を述べる技能）であった。2番目と3番目に需要の高かったのは講義を聞きながらのノートテイキングのスキル、スキミングとスキャンニングスキルであった。昨年度から、「読む」「話す」「聞く」「書く」の4技能をバランスよく身につけることを目標に授業を計画してきたが、来年度はディスカッションや身近な問題に関するグループトークの時間をさらに増やすことでスピーキングスキルの向上が目指せるような授業を計画していきたい。

アカデミックスキルの授業で学びたいスキルを順番で答えてください。一番学びたいものを1、次に学びたいものを2、3、4、5と回答してください。



☆ 新学校設定科目「アカデミックスキル（3年）」

3名のみでスタートした3年次のアカデミックスキルでは、ALT のいる1時間（木曜日）に海外大学出願時や入学後の学業に必要な英語のスキルアップ系の内容を、JTE のみの1時間（金曜日）に海外進学に関わる内容や面談を行った。年度当初の計画では、進学を希望する海外大学の出願エッセイを書くことを予定していたが、3名ともエッセイを課されないということで、代わりに IELTS の目標スコアを達成するためにスピーキングとライティングを重点的にトレーニングすることとなった。以下が今年度の学習内容の概略である。

前期中間（4-6月）

- ・ALT が読み上げたものをノートテイキング
- ・ALT のプレゼンを見てノートテイキング&アウトライン作成
- ・各自が選択した動画を視聴してノートテイキング&アウトライン作成、内容をプレゼンテーション
- ・IELTS や TOEFL 等の英語検定を調べてプレゼンテーション
- ・IELTS スピーキングテスト練習
- ・トピックについてディスカッション
- ・進学カウンセリング

前期期末（7-9月）

- ・英字新聞から記事を選び、アウトラインと自分の意見を書く
- ・トピックについてディスカッション
- ・IELTS スピーキングテスト練習
- ・インタビューテスト
- ・進学カウンセリング

後期中間（10-11月）

- ・アカデミックライティングの書き方
- ・英検2級&準1級ライティングテスト練習
- ・IELTS Task 1 & 2 ライティングテスト練習
- ・ライティングテスト
- ・IELTS スピーキングテスト練習
- ・トピックについてプレゼンテーション

3名という少人数だからこそ個別での進学カウンセリングや個々の要望に応じて柔軟に授業内容の変更を行うことができた。特にスピーキングやライティングというアウトプット活動は、通常のクラスサイズの授業とは比較できないほど一人ひとりに時間をかけて指導することができ、海外進学を控える生徒たちの支援をすることができた。

☆ その他

昨年度に引き続き、「Mirai 研レポート」を委員会で作成し、教室掲示や Google

Classroom、C4th（統合型校務支援システム）などに掲載することでこの事業の概要や研究の成果報告を本校生徒や職員に周知してきた。外部の方へは、学校案内パンフレットの配布や体験入学時に事業説明を行うこと等で情報発信を行ってきた。保護者には学校のHPに本校の実践等を掲載することで研究の進捗状況を報告してきた。また、体験入学に参加した中学生や保護者、中学校教員対象に事業説明も行った。さらに、長野県教育委員会が主催する「長野県高校生探Qフェスティバル 2024」では本校の2年生の国際教養科の生徒と共同で研究発表を行い、研究成果を多くの方に知ってもらう機会を設けた。

昨年度からの課題として、人事異動などで研究内容の引継ぎが十分されていないことや、これまでに研究成果や実践などが本校の職員の中で十分に浸透していないということがあった。そこで、これまでの研究の成果などをGoogle Sitesにまとめ、すでにいる職員も今後赴任される職員にも本校が開発した独自の教育プログラムを理解し、実践に協力してもらえるようにした。作成したウェブサイトが本校職員の授業実践などに活用されることを期待している。

また、これまでの研究は職員主導の実践が多かった。この研究が自走していくためには生徒の主体的な取組も必要となってくる。そこで生徒会の役員と話し合い、生徒総会の議案書に10の学習者像について記載してもらうようにした。具体的には委員会の通年の活動や文化祭の係活動でどんな学習者像を目指して活動をしたいのかを書くように議案書をアップデートしてもらった。さらに、この研究で欠かせない10の学習者像のポスターを美術部の生徒に描いてもらい、校舎に掲示することで目指すべき学習者像のイメージを生徒が持ちやすくなるようにした。このように生徒が主体的に学習者像に近づこうとするきっかけを作ることで、この事業が生徒と共に自走していくことを願っている。

③ 取組や成果の情報発信、普及に向けた取組

- ・「Mirai 研レポート」による生徒・保護者への広報活動（Google Classroom 配信、教室掲示、HPにも掲載）
 - 7月17日第①号 未来の学校事業と新学校設定科目について
 - 10月29日 第②号 未来の学校事業と風越高校の目指す10の学習者像について
 - 12月11日 第③号 風越高校の目指す10の学習者像のイメージ
 - 1月23日 第④号 未来の学校事業と風越高校の目指す未来の学習者像について
- ・未来の学校事業に関わる生徒の意識調査（1月に全校生徒対象に実施）
- ・職員会議で研究の進捗状況の報告と実践の協力依頼
 - 4月3日、5月15日、6月19日、7月17日、10月30日、12月18日、2月5日
- ・中学生体験入学における、中学生や保護者、中学校教職員を対象とした「未来の学校事業」に関わる本校の研究紹介と、体験授業における授業実践（8月1日）
 - 来校数：中学生 548 名、引率中学校職員 10 名程度
- ・長野県高校生探Qフェスティバル 2024 における報告 12月14日
 - 国際教養科の2年生が1名参加、発表
- ・海外留学中の本校卒業生との共同ブログによる現地や留学先の学校の様子の発信
- ・本校の研究のこれまでの進捗状況とまとめのウェブサイトを作成し、職員会で共有

(2) 校内実施体制

カリキュラムコーディネーター氏名（ 内山 博貴 ）（教科： 外国語 英語）

実施項目	担当責任者	実施時期、学年
①F-教科指導・単元計画	三石	通年、全学年
②F-ルーブリック・観点別評価	菅沼	通年、全学年
③F-進路指導・留学指導	湯沢、吉沢	通年、海外に興味のある生徒
④新学校設定科目「世界の中の日本」	滝沢	通年、2年国際教養科選択者
⑤新学校設定科目「アカデミックスキル（2年）」	内山、上浦	通年、2年国際教養科選択者

⑥新学校設定科目 「アカデミックスキル（３年）」	山田、加藤	通年、３年国際教養科選択者
⑦その他	内山	通年

(3) アドバイザー

氏名	所属・職	助言分野
坪谷ニューエル郁子	東京インターナショナル スクール理事長	国際バカロレア関連事業について
高島峻輔	兵庫県芦屋市長	新学校設定科目計画について

(4) 連携コーディネーター

無し

(5) 実践校ごとの連絡会の実施実績

第１回	
実施日・時間	7月25日（木）13:00～14:00（オンラインで実施）
参加者氏名 （所属・役職）	高野芙美（長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課 高校教育指導係 指導主事） 下島斉（飯田風越高校・教頭） 山田春樹（飯田風越高校・教諭） 三石秀文（飯田風越高校・教諭） 菅沼孝太（飯田風越高校・教諭） 内山博貴（飯田風越高校・教諭・カリキュラムコーディネーター） 滝沢康紀（飯田風越高校・教諭）
協議内容	・研究の進捗状況について ・中間報告会に向けた事前打ち合わせ ・本研究のまとめ及び自走にむけた取組についての検討
第２回	
実施日・時間	12月12日（木）13:25～14:15（対面での実施）
参加者氏名 （所属・役職）	高野芙美（長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課 高校教育指導係 指導主事） 下島斉（飯田風越高校・教頭） 山田春樹（飯田風越高校・教諭） 三石秀文（飯田風越高校・教諭） 菅沼孝太（飯田風越高校・教諭） 内山博貴（飯田風越高校・教諭・カリキュラムコーディネーター）
協議内容	・成果報告会に向けた事前打ち合わせ ・本事業の成果や自走に向けた取組についての検討
第３回	
実施日・時間	3月17日（木） <u>14:00～16:00</u> （対面での実施）
参加者氏名 （所属・役職）	坪谷ニューエル郁子—東京インターナショナルスクール理事長 (zoomでの参加) 高島峻輔 兵庫県芦屋市長 <u>徳永佳代</u> 高野芙美（長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課

	高校教育指導係 <u>主幹指導主事指導主事</u>) <u>下井一志 (飯田風越高校・校長)</u> 下島 齊 (飯田風越高校・教頭) 山田春樹 (飯田風越高校・教諭) 三石秀文 (飯田風越高校・教諭) 菅沼孝太 (飯田風越高校・教諭) 内山博貴 (飯田風越高校・教諭・カリキュラムコーディネーター)
協議内容	・本事業のまとめ

(6) 項目別実施時期・期間

実施項目	実施日程 (月)											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
(1) F-教科指導・単元計画	① ②	① ② ③	②	② ③	② ③	②	② ③ ④	② ③	② ③	② ③	② ③	③ ④
(2) F-ループブック・観点別評価	① ②	②	② ③	②	② ④	②	②	②	②	② ③	② ③ ④	①
(3) F-進路指導・留学指導	① ② ④	② ④	② ④	② ③ ⑤	②	②	②	② ③ ⑤	② ④	② ④ ⑤	② ⑥	①
(4) 学校設定科目「世界の中の日本」作業部会	② ③	②	②	②	② ④	② ③	②	②	②	②	② ③	① ④
(5) 学校設定科目「アカデミックスキル」(2年) 作業部会	① ②	②	②	②	② ③ ④	② ④	②	②	② ④	② ③	② ④ ⑤	⑤
(6) 新学校設定科目「アカデミックスキル」(3年) 作業部会	① ②	② ③	②	②	② ④	②	② ③	②	② ④	③	④ ⑤	⑤
(7) その他	② ⑦	⑦	⑦	① ⑦	③		① ②	④ ⑦	① ⑤ ⑦	① ⑥	⑦	

職員会

5月15日 本質的な問い8個のテーマ①、6月19日 本質的な問い8個のテーマ②とメタ・ループブック、7月17日 パフォテストの文脈、11月14日 まとめ、3月5日 反省職員会

◇ F-教科指導・単元計画

① 研究グループでの研修会

昨年度までの実践状況報告、今年度の実施計画、「本質的な問い」や「ループブック」の実践について議論

② F-単元計画の研究・実践

F-単元計画の研究・実践、実際の授業実践による感想共有

③ 生徒の振り返りによる検証・評価

生徒アンケートなどによる検証、10の学習者像の意識付け

④ 研究グループ報告会

実践報告、まとめ、改善案の提示

◇ F-ループブック・観点別評価

① ループブックを活用した授業、評価の実践

パフォーマンステストや普段の授業におけるルーブリックの活用の呼びかけ

② ルーブリックに関する情報交換（職員会議等）

職員会議にて、ルーブリックを活用した評価の実践について職員への周知

③ ルーブリック・観点別評価職員研修会（10月30日）

メタ・ルーブリックの説明や担当職員による先行事例の紹介

⑤ ルーブリックを使用した授業内テスト（5月14日～5月22日、1月7日～月16日）

◇ F-進路指導・留学支援指導

① 全校生徒対象に海外進学に関する意識調査を実施。海外進学に興味があると回答した生徒でGoogle Classroom「F-Style Study Abroad」を作成（4月）

② 留学講座・相談会の案内（4月～1月）

「マレーシア大学進学説明会（本校生徒向け）」、JASSO 奨学金ランチタイムセミナー、留学フェローシップ関連イベント、オーストラリア大学進学情報誌、アメリカ大学進学情報誌などの周知と配布

③ FUETSU Global Camp の実施（7月26日）

内容：海外大学進学についての説明、大学紹介、自己分析ワークショップなど

④ マレーシア大学の指定校推薦についての周知（7月）

内容：本校と提携しているマレーシアのTaylor's University と Sunway University の指定校推薦についての情報の周知

⑤ マレーシア大学進学説明会の動画視聴（11月12日）

内容：マレーシア大学と入試方法等に関する説明

⑥ 語学研修の際に大学見学をプログラムに入れた。（2022年度から現在まで）

◇ 新学校設定科目「世界の中の日本」

① 研究グループでの研修会

昨年度までの実践状況報告、今年度の実施計画

② 授業実践・修正

③ 生徒の振り返りによる検証・評価

生徒アンケートなどによる検証

④ 研究グループ報告会

実践報告、まとめ

◇ 新学校設定科目「アカデミックスキル（2年）」

① 研究グループでの研修会

昨年度までの実践状況報告、今年度の実施計画

② 授業実践・修正

③ 生徒の振り返りによる検証・評価

生徒アンケートなどによる検証

④ 研究グループ報告会

実践報告、まとめ

⑤ 来年度のカリキュラム検討

☆ 新学校設定科目「アカデミックスキル（３年）」

- ① 研究グループでの研修会
昨年度までの実践状況報告、今年度の実施計画
- ② 授業実践・修正
- ③ 生徒の振り返りによる検証・評価
- ④ 研究グループ報告会
実践報告、まとめ
- ⑤ ３年次の学習内容の検討、シラバス作成

☆ その他

- ① 「Mirai 研レポート」による職員会議での研究の進捗状況の報告など
7月17日 第①号 未来の学校事業と新学校設定科目について
10月29日 第②号 未来の学校事業と風越高校の目指す10の学習者像について
12月11日 第③号 風越高校の目指す10の学習者像のイメージ
1月23日 第④号 未来の学校事業と風越高校の目指す未来の学習者像について
- ② 哲学対話（4月22日、10月25日）
- ③ 中学生体験入学において中学生や保護者や中学校職員に対して未来の学校事業に関わる本校の研究の紹介と、授業実践（8月1日）
- ④ 未来の学校事業に関わる生徒の意識調査
- ⑤ 第1回長野県高校生探Qフェスティバル2023における報告（12月14日）
- ⑥ 県立高校「未来の学校」構築事業最終報告会（1月17日）
- ⑦ 職員会議で研究の進捗状況の報告と実践の協力依頼（4月3日、5月15日、6月19日、7月17日、10月30日、12月18日、2月5日）

3 国際的な教育プログラムを研究する

○ 研究の概要

国際的な教育プログラムについて研究し、国際社会で活躍できる資質・能力を育成する教育課程を開発するとともに、海外大学進学希望者のためのプログラムを構築する。

【実践校 飯田風越高等学校】

○ 構想名

リニア新時代の「小さな世界都市・田園型国際学術都市」を目指す南信州における、国際的な教育プログラムの長所を活かしたカリキュラムの研究開発と、他校にも開かれた海外大学進学プログラムの構築

○ 目標

地域に根ざしたアイデンティティとグローバルな視野をもって、地域や世界の未来を創造できる人を育成するために、国際的な教育プログラムの長所を生かした飯田風越独自のカリキュラムや学びの指導・評価方法を研究開発するとともに、学びの成果を活かしながら、海外大学進学を実現するためのプログラムと支援体制を構築する。

○ 構想図

